

# フィジー伝統木造住居ブレの持続可能性に関する調査研究 -ザウタタ村におけるコミュニティの共同労働に着目して-

鈴木 雄一郎

キーワード： フィジー農村集落、伝統木造建築、住居形態、共同労働

## 1. 背景と目的

フィジー共和国(以下、フィジー)の農村部において、近年の社会変化に伴う伝統的生活の変容は顕著である。特に伝統的居住文化としての、先住フィジー人の木造住居「ブレ」はほとんど姿を消しつつ状況にある。筆者が所属する人間環境設計論分野は、2011年にCATD(フィジー適正技術開発センター)と共同でブレの“再建プロジェクト”を行った。同プロジェクトで、棟梁を含む主要メンバーとして近郊のザウタタ村から9名の村人が建設に携わったが、プロジェクト終了後に、参加者が中心となりブレの自主建設をおこなった。ザウタタ村でも他の多くの農村集落と同じように、1940年代までは集落の全住居がブレであったが、現在では1軒も存在していない

この自主建設を契機に、今後伝統的な居住文化を継承していけるだろうか。本調査研究では、ザウタタ村でのフィールド調査に基づき、ブレの建設や修繕に必要な共同労働に着目しながら、コミュニティ内の共同活動の現状を把握し、住居形態の変遷過程との関連を分析することで、伝統的生活の基盤となる共同作業の維持可能性、伝統的住居であるブレの持続可能性について検証する。

## 2. 住居形態の変化

ザウタタ村における住居形態の変容とその事由を整理し、ブレ減少の経緯を時系列に把握した。これにより、ザウタタ村における住居形態の変容は段階的に発生していること、建築資材を購入する現金収入の機会増加が、住居形態変容のきっかけとなったことが分かった。また、自然材料を利用した住居は壁や屋根を頻繁に修繕する必要があるため、「手入れの煩わしさ」を避けること等を理由に近代住居が好まれるようになったことも分かった。

## 3. コミュニティ内の共同労働

集落周辺の自然資源を利用し村人達の合力によって建てられるブレの建設には、“コミュニティ”の協働が必要不可欠である。本調査研究ではザウタタ村の“コミュニティ”及び“コミュニティ内部の共同労働”が伝統的にどのように維持され、また現状はどのようになっているかを把握した。農作業や住居建設などかつては多くの集落住民が従事した作業を、現在は個人や家族集団(トカトカ)、血のつながった氏族集団(マタンガリ)などより小さな社会集団で行っていることが分かった。小さな社会集団においては、いまだ日常の交流や相互扶助が親密におこなわれている。

## 4. 2つの建設がもつ意義

ザウタタ村の村人が過去に行った2つの建設の意義を、関係者へのインタビュー調査から考察した。「建設体験」が自分たちの持つ建築文化の価値を再認識する機会に繋がったこと、「継続的な建設」が伝統知や技術を定着させるために必要であることを村人たちが認識していることを確認した。また、機能的にも氏族集団の集会や礼拝、訪問者をもてなす場所として利用されていることも把握した。

## 5. 結論：ザウタタ村におけるブレの持続可能性

ザウタタ村でのフィールド調査を通して、ブレ建設に必要な要素である“コミュニティ”の連携が期待できる状況にあることを確認した。しかしながら、手入れの煩わしさから、村人に使われなくなったブレが再度住居として浸透することは考えづらい。住居以外の機能をもつ積極的な動機付けが必要である。ブレの用途としては、セカンドハウスや儀式の場、ツーリズムの資源としての活用が考えられるだろう。今後、ブレの持続可能性の検証を進めるためには、こういったブレの用途についてより詳細な検討を行っていく必要がある。